

異文化体験とライフコース第2報

ー帰国子女のインタビュー調査よりー

竹田 美知

はじめに

帰国子女の異文化体験に関してはこれまで数多い研究がされてきた。1988年、カニンハム・久子の「海外子女教育事情」、1991年、箕浦康子による「子どもの異文化体験」、1993年、岡田光世「ニューヨーク日本人教育事情」などにみられるようにそのほとんどは赴任国における子どもの適応状態や帰国後の適応状態に研究の焦点を絞ったものである。筆者の研究目的は、このような帰国子女のライフコースの1時点を輪切りにして適応、不適応というラベリングをすることでなく、それぞれが得た異文化体験の意味づけによって今後のかれらのライフコースへの考え方がいかに変化したかを探るものである。

筆者は、1998年2月アンケート調査を行った。そこで得られた結果は相愛女子短期大学研究論集題46巻で報告したように、異文化体験を人生の早い段階で得た者は、そうでない者に比して将来のライフコースにおける異文化体験を積極的に持つであろうという仮説は検証されなかった。そこでこの仮説の精練をすすめるために異文化体験の有無ではなく、個人個人の異文化体験の意味づけが、多様な帰国子女のライフコースパターンを生み出すのではないかと仮説の精練を試みようとしている。帰国子女の異文化体験の意味づけは滞在時期、滞在期間、帰国後の年数、家族との同居状況、滞在国などによっても大きく影響を受ける。また帰国子女を取り巻く家族の異文化体験の意味づけや海外や帰国後の友達との交流状況も、異文化体験の意味づけに関わってくると予測される。そこで、帰国子女の異文化体験の意味づけを探るために仮説索出の過程としてライフコース分析に着目して今回のケーススタディーを企画した。

研究方法

プラスが言うようにライフコース分析は各人にとってのライフコースの主観的意味づけ、個々人のライフコースを彩る様々な出会いや偶然とも言える諸事件、それらを通してのその人ならではの人生を作っていくレトリックを探し出そうとする試みも含まれる。またライフコース分析に基づくケーススタディーで重視されるのは、転機となったいくつかの節目でのきっかけ要因、促進要因、阻害要因さらには個人のそうした転機に対する主観

的意味づけなどの解明である。その際ライフコース論で注目されるのは、そうしたライフコースを共有し、その人のライフコース証人であって、また決定的影響を与え、支援者であったような人生上の重要な他者の存在である。近親者や友人、先輩、上司、恩師などに人々がコンボイと呼ばれ、図1のように個人をめぐる重要な他者として存在している。今回のケーススタディーでは、以下の3点からライフコース分析を行う。

- 1) 海外在住した時、帰国時などの転機で異文化体験にどのような主観的意味づけが加えられたかを解明する。
- 2) 1) の異文化体験に対する主観的意味づけが帰国子女の将来のライフコース設計にいかに関与したか。
- 3) 帰国子女をめぐるコンボイの存在をあきらかにし、海外生活から帰国を経てコンボイのネットワークがいかに関与したか。

1999年1月から2月にかけてK高校3年生の帰国生7名の協力を得て筆者による個別面接を実施した。一人につき2時間から3時間を行い、その際得た録音テープから直接起こした第1データをもとに時系列の流れに着目して編集したのが下記のケースデータである。表1は、各ケースの家族構成、滞在国、滞在歴、移動歴、海外在籍校を示したものである。

ケースデータ

1) B (男性) のケース

小学3年から香港に家族とともに約6年間半滞在した。香港に行くことについて、親からは相談はなく、もう決まっているという感じだった。しかし当時香港へ行くと聞かされた時、欧米諸国の方がよかったのと思った。日本人小学校に入学したので日本人の友達が多く日本の遊び、ゲームをしていた。現地の同年齢の子どもとの付き合いはほとんどない。ただ、日本人学校のスポーツチームを通じての交際、交流試合は時々あった。日本人学校では、香港のことを学ぶというよりも、現地見学してそのレポートをグループ発表したりしていた。香港には日本人が固まって住んでいる所があって、日本と変わらない生活を送っていた。香港で家庭を訪れる人は会社関係の人が多く、現地の人とは友達になった人はいない。旅行は、日本にいたら行けないようなタイやハワイ、インドネシアに行った。香港に来ている外国人はフィリピン系の家政婦さんをしている人や家庭教師や塾を営んでいるイギリス系の人達がいる。友達のところの家政婦さんが、お金を寸借して逃げてしまったという話を聞いたこともある。香港の人をつきあうと危ないよと言われたこともあるが、自分自身も中学3年生の時にからまれた。戦争がらみでなく、日本人はお金持ちということで、バカにされたことがある。しかし香港では外国人だからといって特別な意識はされたことはない。しかし日本では外国人を意識する。言葉の点での苦労は、むしろ香港へ行く前に広島から千葉に行った時、標準語になれるのに苦労した覚えがあるが、日本

人学校は標準語なのであまり苦労しなかった。

クラブは加入していたが、ほとんど塾通いの生活で模擬テストもあった。塾はきつかった。姉も3年前に祖父母の住む福岡の高校へ家族より先に帰国していたし、高校は日本と決めていた。香港には日本の高校がないので、このK高校を含めて4つ受験をした。香港時代の日本人の友達は関東が多く、1年くらいまでは連絡をとりあっていた。

高校入学後は、大学までエスカレートで行けると聞いたので安心して遊んでしまった。高校2年の半ばからやらなきゃいけないのかなという感じになった。親が香港にいるので寮生活を余儀なくされた。自分のことを自分でするのは慣れたが、生活を拘束された。高校は帰国子女受け入れ高校でよかった。自分は帰国子女のほうが付き合いやすい。一般生は公立中学から激しい受験戦争をくぐりぬけた人達だから、ちょっとついていけない部分もあったが、三年間で最終的にみんな同じような感じになった。バンドを趣味でしているが、全員帰国生徒で組んでいる。僕の一番影響を受けた人物はXジャパンのヒデである。K高校の服装は自由でアメリカからの帰国生が多いせいか、アメリカの高校生の影響を受けたファッションが多い。これまで高校1年から7種くらいのバイトをした。高校時代、両親のいる香港に行ったのが開放感がある。香港が中国へ返還されたのは高校生の時だが、そんなに変わらない。両親は今も香港に住んでいるが帰国は未定である。もしかしたら北京の方へ行かされるかもわからないと言う話も聞いた。その場合、母も同行すると思う。

将来は、就職は日本でしたいと思っている。自分たちの話す言葉が理解されるので。国際結婚はちょっと考えられない。香港にはまた住んでいいが、タイやインドは観光で行っても住むのはきついし慣れない。もし行くのならオーストラリアに行きたい。言葉とかでなく、海外では一般生ができないような貴重な経験があるように思う。絶対どこかで役にたつと思っている。今バンドに熱中しているが、あくまでもこれは趣味で仕事は大学で勉強してそれでなにか見つける。

日本に來ている外国人でビザのない滞在は最後の手段としてやむを得ない感じがする。これまで一番充実していたのは、バンドでライブをしてお客がのってくれることや古典の成績が10だったことである。また一番苦しかったのは、高校へ入っての寮生活と持久走であった。

2) Y (男性) のケース

小学校五年から香港に4年間滞在した。香港の日本人学校は大きく6クラスもあり、学校全体で400人くらいのマンモス小学校でだった。中学校はもう少しクラスも減った。日本人学校へスクールバスで通って、帰ってきてから遊ぶのも日本人、食べ物も日本食が中心だった。高校受験のため塾もあり、通っていた。現地の学校との交流はその場限りの交流はあったが、近所の現地の人との触れ合いは公園でバスケをともにするくらいだった。父

の会社は小さいので現地の会社の人達は12人くらいで現地の人とはトラブルはなかった。乗り物はタクシーを割勘でよく使っていた。香港は、国際都市なのでいろいろな料理を食べていた。言葉で困ったことは、日本人学校は東京弁なので、関西弁を直すのに苦労した。もちろん家では関西弁だった。

日本に帰るのが早まってしまい地元の中学校に1年いた。小学校の時の友達が悪者になって荒れていた。勉強面では全然遅れもなく逆に日本の学校の方が遅かった教科もあった。受験のために塾にも行った。K高校帰国生枠3教科で入学して、英語に関しては自信があったのに全然できなくなってしまった。K高校の中学からきた人は、固まっていたがそのうちみんなとけ込んでいった。大学は経済学部が決まった。

将来、香港で派遣されて働いていいと思っているが、仕事をみつけに香港にまで行くことは考えていない。国際結婚に関しても相手によるけど日本人のほうがよいと思う。趣味を大事にしたいが、税理士や会計士の資格を取って定職を確実にしたい。アルバイトをしながら世界中旅をしたりリュックサック一つで旅をしたりするのはイヤだ。またマレーシアやタイの人には自分の中にいけないことだが先入観があって、住む所など問題があるような気がする。

これまで一番うれしかったことは、数学の成績がよかったこと、原付免許を手に入れたことだった。苦しかったことは、高校の定期テストで全然やってない状況でがんばらないとダメだったから。

3) S (女性) のケース

3歳からイギリスへ8年間、そして11歳の時にイタリアへ4年間、家族と共に滞在した。イギリスでは、小さかったので言葉の点では不自由しなかっただろうとよく言われるが、現地人に比べると表現力は劣っていたのでときどきついていけないことがあった。また小学校時代、ランチにおにぎりを持って行って海苔が黒いということで気持ち悪いといわれたり、髪の毛が黒いと言われたりするのが嫌だった。日本人は近所に住んでいなかったの、現地の友達ばかりだった。その友達の国籍はインド、オランダ、アイルランドなど多彩だった。住んでいたのはメードンヘッドという田舎だった。家族ぐるみの付き合いも多く、特に母も日本の友達よりも現地イギリスの友達の方が何でもはっきり言えるので楽に付き合えるようだった。母の性格は心の中に思っていることを隠して接することのできないタイプで、イギリスでは思ったことをはっきり言うので環境がぴたりとあっていたようだ。食べ物は日本食とあちらの食事と半々のメニューだった。日本食はロンドンまで買いだしに出かけていた。言葉に慣れてくると、家庭でも英語の方がメインとなり日本語がだんだんしゃべれなくなってきた。そのころのイギリスでできた友人とは現在全然付き合っていない。イギリスのイメージは、レディーファーストのようにロイヤルというか正統派

でフォークやナイフの持ち方にこだわっていたように思う。

11歳の時、父がイタリア、ミラノに転勤することになり、みんなでまさかと驚いたが冒険心もあってイタリアに行くことにした。親も自分も日本人学校にするか、英語ができるのでインターナショナルスクールにするか、判断に困った。その頃は日本語の作文がまったく書けない程の日本語力だったので、結局行くことになった日本人学校でも慣れない日本語で苦労した。ひらがなとか漢字をいちいち覚えて慣れていった。イタリアの日本人学校は、日本の学校にしては小規模で1クラス20人くらいで中学生など11人と少なかった。当然イタリアの友達是一人もいなく、近所に住んでいた日本人学校の友達がたくさんできた。この人達とは、いまでも連絡をとりあっている。マンション暮らしで同じ棟の日本人のお母さん達はお茶会とかでよく集まっていた。友達の中では英語ができるので、今から考えると特権みたいにいばっていたと思う。イギリスからイタリアへ来て、日本人学校、塾に通い出したので学習環境がガラッと変わった。定期テスト、海外に住んでいる人のための模擬試験とか常にテスト、テストと塾と学校両面からあった。イギリスからイタリアへ移って、マナーの点では特にレディーファーストが守られていない感じで、日本人学校でも街中でも男も女もないんだなと思った。また日本人はお金持ちと思われているので、日本人ねらいの泥棒やすりも多く、男の人も声をかけてくる人いた。しかし、イギリスより思い出も多く楽しかった。ミラノは交通機関が地下鉄中心なので、どこへ行くにも不自由しなかった。ミラノなので日本人観光客も多いが、ブランド品を買いまわって大声を上げている人を目にすると恥ずかしかった。

K高校へ帰国性枠で英語の論文試験で入学した。家族は帰国できなかったの、寮生活を経験することになった。生活に制限が加えられて、食事やお風呂に時刻をきられたり、3,4人部屋で常に何をすることも友達と一緒にということで拘束されていた。先輩、後輩の関係もあり、クラブも食事の時間の関係で両立は困難である。学校はビデオを見て、アメリカの学校のように自由であることからK高校を選んだが、そこまで自由ではなかった。しかし公立の学校に比べると自由であると思う。帰国生徒の8割はアメリカからの帰国なので、授業の英語の発音もアメリカ英語である。だからイギリスはマイナーな立場にあるので、アメリカへの憧れはどんどん膨らんだ。家族が1年後帰国したので、寮生活から開放された。しかし、父は東京の方へ職場が決まり単身赴任、母と弟(私立中学)と住み、通学2時間で通っている。母は現在大学と塾の講師をしており、趣味のパソコンでも資格を目指している。そんな事もあって、夕食は1日500円のアルバイト料をもらって私がつ作っている。弟は英語を私ほどマスターしていないが、勉強にがんばっている。父は週に1回帰ってくるが、自分とはあまり気が合わないのかしゃべらない。弟とはよく話している。将来は、また海外で住むことはあまり考えていない。日本は「便利」、特に交通の便利がいいので、慣れてしまうと他の所で住むというのは考えられない。海外は不自由に思う。英語

が堪能なので、将来そういう仕事ねと聞かれるが、限定されているようで嫌な気がする。自分からは海外に行かないけど、行くのだったらアメリカに行きたい。よく海外経験のない子が海外へ行きたいというが、海外へ行ってきた人達にとっては自分の母国が一番である。国際結婚についても絶対でない。同じ国の人に親近感がある。自分の中に特にアジア・中東系に対して偏見とか差別があるように思う。例えばそのような顔立ちの人を見ると、怖い、危険な感じがしてかばんをぎゅっと握るみたいな偏見がある。これは、イタリアにいた時、中東系の人やジブシーの人が車が止まると窓拭きを強引にやっていたことにもよる。将来自分がなるのなら、化粧品関係のメイクアップアーティストになりたい。小学校5,6年からの夢である。大学をやめて専門学校へ行きたいと言ったが、親に反対された。親は以前化粧品会社に勤めていたが、自分がその道に行くことは反対する。将来こうしてほしいとはいわない。大学へは行けとは言うけれど自分のことは自分でやりなさいと言う。

これまでの人生で一番悲しかったことは、ミラノ日本人学校にいる時理科の実験中、事故で腕に焼けどを負ったことである。親が初めて泣いて集中治療室に1ヶ月いた。やけどは一生残ることになった。一番嬉しかったことは、環境が変われば、友達も変わり寮をでて友達が増えたことである。高校3年間いろいろな人と仲良くなった。

4) A (女性) のケース

父と母は結婚してすぐ2年ほどロサンゼルスで暮らし、日本で私を生んで、私が3歳の時テキサス州ダラスに海外赴任が決まった。すぐに現地のモンテソリーの学校に入り、靴紐を結ぶ練習や簡単な算数をした。キンダーガーデンから小学校3年生まで公立の小学校へ行った。この時は、中国やインドの友達もでき、近所の子ども達と頻りに遊んでいた。4年生から私立のカトリック系の進学校へ編入した。私は親がそこに入れることが嫌だった。公立よりレベルの高い共学学校で、ラテン語やスペイン語の授業もあり、友達とかクラスの中で競争があった。人数は2つの学年で1クラスを組むほど小さいクラスであった。最初は人数も少ないし、同じ学年の子がいなくて友達がいなくて嫌だったが、だんだん慣れてきた。厳しいカトリックの学校で制服もあったし、毎朝のミサもあったので大変だった。しかし、先生とのコミュニケーションが充分ありちゃんと勉強していた。成績とは別に、授業態度、人との接し方等の点が総合して評価される。教室もじゅうたんがひいてあり、先生の机に飾りつけがあったりリラックスした環境であった。この私立学校では、メキシコの子と一番仲良くなり、またお父さんがオーストラリア人、お母さんがドミニカの人という子とも仲良くなる。私立学校へ移ってから近所の友達と疎遠になり、学校の友達と仲良くなる。日本人補習校は車で30分の所にあり、毎週土曜日行っていたが、土曜日現地の子が休みなのに自分だけ行くことが嫌で宿題はやったりやらなかったりであった。その

補習校で友達になったのは、すぐに転出してしまいう子ではなく、小さい頃から永住している子と友達になった。言葉は兄弟では英語、親には日本語で、気持ちを伝えるには英語をしゃべっている方が、ぴったりしていた。ダラスは危ない所と新しいきれいな所とが分かれている。スラム街もあって、カトリックの学校へ行っている時はホームレスのシェルターに手伝いに行っていた。自分の住んでいる所は、新しくてきれいな所だったので、お金持ちの人が多く南部だからと言って差別を自分に受けたことはなかった。父は、毎週日曜日、ゴルフをしており、母は日本人に英語を教えたり美術館でガイドをしてボランティア活動をしていた。日本人で固まるより、アメリカの友達の方が多かったように思う。アメリカのお母さんはみんな仕事をしており、5時か6時に帰ってくる生活のように思う。私の家はお母さんの友達泊まりに来たり、私の友達遊びに来たりで現地の人との交流が絶えずあった。

帰国前に、体験入学をしたが、トイレの使い方が分からなくて、1日中トイレの我慢をしていた。教室の中もガランとしていてアメリカの学校のような温かみを感じられなかった。だから12歳の時、帰国が決まった時はショックだった。日本に住んだ記憶もはっきりなかったし、母も日本に帰るには抵抗があったように思う。

K中学へ入学後、日本語力がなかったので国語は小クラスへ入った。英語の授業は簡単でなにも準備しなくても充分だった。国際といっても普通の日本の学校のような感じであった。クラス人数も多いし先生が遠い。ノートをとってテスト前に勉強すれば点数がとれる感じであんまりやる気が起こらない。質問をされたり、意見が発表できたりする場がないのでがっかりした。中学時代は、アメリカへ帰りたくてしょうがなかった。最初にできた友達は帰国生徒ではなかった。日本の小学校からきた一般生だった。帰国生同士と一般生同士が固まっているということはなかったように思う。高校へ入ってからは、新しくできた友達もいっぱいいるが、いざとなると中学校からの内部生のほうが、仲がいいかなと思う。

母は、帰国してから、ガイドの資格を取ってお寺のガイドをしたりボランティアをしたりしている。母はアメリカ育ちの私達に日本の良さ、歴史、風景などを教えたかったようだ。10歳で帰ってきた妹は、日本に帰ってきて日本の公立小学校へ入学したが勉強ができなかったのではないと思う。アメリカで小さいときからバレーをしていたので、日本でもそれを続け、勉強もがんばった。最初の頃は、アメリカに帰りたいたとばかり言っていた。弟は7歳で帰ってきたのでアメリカにいた頃のことは覚えていない。日本の生活の方がメインになってしまっている。住んでいる地域は結構外国人がいる。母が、外国人のため市役所で通訳をしたり、ガイドであった人を家に招待するので結構外国人が行き来する家庭である。中3の時ダラスに行ったが、あの頃の友達と自由に話せた。高2の時再度訪問したが、離れている期間が長くなると友達にもあまり会えなくなってしまった。

大学は法学部に決まったが、やりたいのはメディア関係である。大学に新聞専攻もあったが、新聞と限定しているのが気になり、もっと枠を広げて勉強したいという気持ちと成績がよかったので法学部にした。大学へ行けば自分の好きな勉強をしようと思っている。今までは帰国子女受け入れ高校であったので、日本語と英語を混ぜて話しても大丈夫であったし、日本の考え方でなくても分かってくれる人がいた。大学に行くと受験勉強ばかりして頭が硬そうな人が多いので少し不安がある。日本では大学で遊ぶ人が多いが自分は遊ぶことに流されないで勉強しようとしている。本当はアメリカの大学へ行きたかったが両親に反対された。両親はアメリカの大学に行っているだけじゃアメリカで就職は見つかるかも分からないが、日本に来てなんにもできない。アメリカへ行っても、同じ学歴のアメリカ人がいたらそっちを雇うから不利になるといわれた。今は日本の大学へ行ってアメリカの大学院へいくなりしなさいといわれた。だから就職は日本ではなく、アメリカをベースとしていろいろな所へ転々と行けるようなそんな仕事をしたい。例えばジャーナリストのような仕事をイメージしている。日本とアメリカの両方の視線を持って仕事するのが夢である。アメリカをベースとするのは、会社から帰ってきてからの時間が長く、時間の流れが違うように思うからである。季節感もあり、大人でも生活を楽しんでいるように思う。国際結婚に関しても、日本人とでも外国人とでもどちらでもよい。両親も、定年後は海外へ2人で行こうかと話しているのを聞いたことがある。1箇所にいるよりいろいろと転々としたい希望を持っている。

一番辛かったことは、高校の時のクラブ部活動である。バレーボール部で上下関係もあるし、練習の内容もきつかったし先輩がすごく嫌いだったりして辞めたいといつも思った。楽しくバレーをしたかったのに先輩に怒られるのが怖いといつも思った。でも2年になって自分達が上に立つと自分がうまくなりたいからがんばって精神的に楽になった。

5) T (男性) のケース

小学校の時、周囲は塾通いの生活だったが、空手とかしてのびのびとやっていた。しかし中学に入るとイギリスに行くことが決定していたので、塾と家庭教師の勉強によってすでに中2の時に3年までの内容をしてきた。公立の中学だったがガラスが割れたりして荒れていた。14才の中2の夏、イギリスに渡り1年半生活をしてきた。

イギリスでの学校生活は最初教室移動が分からなくて困った。また英語で一日中授業を受けることが苦痛で学校へ行くのが嫌になった。日本人は少ないし自分の学年には日本人は自分1人だけだった。イギリスの学校は小学生からもっと年上の人までいて卒業後は就職する人、進学する人いろいろだった。イギリスの学校も煙草を吸ったり、先生と幼稚なことでもめたりしていた。3ヶ月くらい経つと、授業内容にもついていくことができるようになり、英語と歴史以外はやさしいと思うようになった。ESLもあって、学年が異なれば

日本人も韓国人もいたが学年が異なるのでまた住所も違うので友達にならなかった。ホームルーム担任の先生がイギリス人2人を紹介してくれて、この2人と最後まで仲がよかった。特にそのうちの一人が音楽好きでCDを見ている時にジャンルが一致し、2人でエレキドラムを始めた。またもうひとりの友達はギターがうまく、よくその人の家でドラムを習っていた。そのころ日本人ということで、空手を教えろとか言われるほどイギリスでは空手がはやっていた。この2人以外友達はいなかった。イギリスは個人主義の国なので、友達関係は濃密ではない。

オックスフォードということでイギリスを訪問する観光客は多いが、イギリスの慣習を知らない人が多い。たとえばレストランで日本のビールがなかったり、食べ物がまずいと文句をいったり日本を中心に世界がまわっているようにふるまっていた。自分達の行ったイギリスの学校はバングラディッシュの人が多く、宗教がイスラム教ということで絶食を守っていた。機械に対する関心もあり時計をよく見せていた。50人位いて、自ら壁を作っていて距離をおいているようであった。イギリス人が突き放していたというイメージはなかった。自分達は近所のアメリカ人夫婦とバーベキューなどをしていた。妹はなかなか慣れなくてキンダーガーデンを登校拒否気味であった。1年弱しかなかったので慣れる前に母と帰国した。母が帰国したので半年は父と暮らし、家事などは自分がした。早く帰りがかったので、帰国を聞いてほっとした。旅行はイギリス国内、アイルランド、ドイツなどへ行った。

K高校へは、英語の論文試験で入学した。入学後帰国生の英語がうまいことにびっくりした。授業で使われるのはアメリカ英語で、イギリスアクセントが恥ずかしかった。イギリスの学校が好きではなかったので、このくらいちゃんと授業をしてくれることはよかった。特にレポートに関しては、レポートの書き方、パソコンの使い方など個人的にアドバイスもしてもらった。服装に関しても自由で当然だと思う。留学生もいたが、自分はほとんど話さなかった。両親とも帰国していたが、自宅が遠いので寮のような民間施設に入った。先輩、後輩関係はゆるく3年が3人、2年が6人、1年が8人で和気藹々とした生活を送った。洗濯などは自分でしなくてはならなかったが、最近の1年生はそれもできない人が入ってきた。テスト勉強もみんな一緒にした。最近の1年生はそれもできない。帰国してすぐもといたいた中学に戻ったが在日外国人差別に接して憤りを感じた。友達の在日韓国人が委員長になることでクラスの先生や生徒からマッタがかけられ「友達が仲間外れにされた」事から事件がはじまった。同和教育だの、歴史教育だのいっているが日常の目の前の差別、しかも子どもころの差別に無関心であることに疑問を感じた。このような見えない差別が戦争や侵略に繋がると思う。同和週間に集中的に差別の歴史を学ぶだけでなく、直面する社会問題と関わってくる歴史、背景を学ぶべきだと思う。

6) K (男性) のケース

小学校1年生から4年間イギリスロンドン郊外で生活し、4年生で帰国して2年間日本の小学校へ通いK中学へ入学した。イギリスの現地校では英語がまったくわからないので学校で泣いていた。でも1年経てばいつのまにか言葉がわかるようになり慣れた。日本の勉強は6歳から帰国するまで通信教育をした。現地校ではほとんどがイギリス人で日本人は自分ただ一人だった。担任の先生がその日に何をするか決めて適当にのんびり読書していた。基本的にはみな同じことをするが、先生の気分次第でどんどん授業が変わっていく。学校でも、習い事としても水泳をしていた。毎日のんびりくらしていた。当時行き来していたのはイギリスにいる日本の家族であったが、イギリスの同年齢の友達ともしゃべりはするがそんなに深い交際はしていない。

帰国してK中学へすすんだのは、兄も行ってたから当然そこに行くものと思っていた。K中学に入学して数学以外はついていけた。英語はアメリカ英語なので、イギリスから帰った者としては聞き取りにくかった。個性のある人がいっぱいいる。帰国の人が多いので海外の考え方を持っている。高校2年から友達に影響を受けて音楽をやりはじめた。大学は商学部を決めた。兄が第1志望で行けなかったのが僕がという気持ちと父のように公認会計士になりたいから。海外赴任は一度ぐらい行ってみたい。一人で行くと心細いし、家族でいくのも何なので日本の方が落ち着く。国際結婚よりも日本人と結婚したい。日本人の方が気を使わなくてよい。

7) F (男性) のケース

香港で生まれて4歳まで滞在した。7歳まで日本にいて、7歳からアメリカニュージャーシーに移り、7年半アメリカにいました。香港の生活で覚えているのは、マンションに住んでいて日本人の子とばかり遊んでいたことだ。

最初はオラデルの公立小学校に入学した。初めの方はやっぱり全然しゃべれなかった。ジェスチャーとかで友達と遊んでいた。自然にしゃべれるようになった。最初にできたのは韓国人の友達で近所に住んでいた。結構仲がよくて家にこないかといわれて行くと、彼のおばーちゃんがいて戦争の時日本人にいじめられたので日本人は嫌いだから家にこないでくれと言われた。僕は泣きながら家に帰った。母が後で説明を受けた。しかし彼とはその後1年家以外で遊んだ。他にも一番親しかったのは中国人、アメリカ人3人と友達になった。この3人とは今でも電話で交流している。補習校で一緒の日本人とも友達になった。またテニスクラブにも所属していたのでそこにも友達がいた。現地の学校はすごく楽しかった。いろいろな人種がいて、日本人や韓国人を全部受け入れてくれる。日本人は僕を含めて2人、ESL(外国人のための英語)はこの2人とスペインからきた人とかいろいろの国籍の人がいた。補習校は4年から中学まで行ったが、中1の時なぜか僕一人になった。

父は僕が中1の時帰国命令がでて日本へ単身赴任し、母と兄と僕でリバベルのアパートへ引越した。父が帰国して、自分達もいつか帰国するのがわかっていたから中1から通わされた。そして中3まで通信教育もした。それでも帰国が決定的になってショックだった。兄も一緒に高校をでて日本に帰ってきて大学受験をした。

帰国後家族がやっと集まったと思ったのに、父が香港に転勤になった。K高校は大学へのエスカレート入学が可能なので受験した。高校1年の時から油断してはいけないと思い、試験の時勉強をした。受験する前はアメリカ的ですごく良い学校と言うイメージがあったが日本の教育法で暗記が多いと思う。英語の時間は40ページぐらいのレポートを書いたりするところは公立と違いよいと思う。服が自由な点が良い。アメリカで韓国人の友達祖母からあんなことを言われたが、帰国して祖母が「韓国人は焼肉くさい」とか言うと、日本人も韓国人に対して偏見を結構持っているなと思った。また、高校に入学する前地元の中学に帰った時、「ニューヨークではホモが多いと聞いたけどあんたもホモ？」と聞かれたり、「銃とかみんな持っているの？」と聞かれたりした。ニュースででることは悪いことばかりで良い事は全然報道されないの、そう言われるのかと思うけどそういうことを平気で言うのは何か1つ聞いたならもうそれがその国のイメージになってしまう。「みんなが言ったら自分も言う。みんながやったら自分もする」という感じを日本人に持った。「住んでも、行ってもないのにそんなこと言うな。」と思った。ファッションでも日本人はみんな同じだ。たぶん韓国や東南アジアも、「イリーガルに入ってきた移民」というのしか聞いてこなかったら、日本人は悪いイメージしかもたない。父に聞くと、韓国はものすごく発展してきていいとこにきていると聞いているので僕はこれらの国に良いイメージを持っている。

将来は海外就職をしたい。僕はアメリカに残りたかったけどその時中学生だったし、経済的にも困難だったから日本の高校へ行った。アメリカの大学へも行ったかったけれど、親は自分のそばで教育を受けさしたいという希望だったので日本の大学、経済学部へ行く。親は大学を卒業したらアメリカの大学へ行って日本の企業でなくアメリカの企業に就職したほうがよいとアドバイスしている。僕自身は日本の大学を卒業してサラリーマンになるだけのライフコースより、アメリカの方が実力主義でやりたいことだったら夢をかなえるチャンスはいっぱいあると言うイメージがある。父の影響もたぶんあると思う。父は中国の発展を熱く語ってくれる。父は広東語と英語が上手だが、英語は兄と僕が慣れていると思う。海外移住はアメリカにしたいと思っている。アメリカのいい思い出があるから、郊外のニュージャージーにまた住みたいと思っている。他の国にはまだ行ったことはないのわからないが、アメリカと日本と比べたらアメリカの方がいいかなと思う。

分析結果

1) 海外在住時，帰国時の異文化体験の意味づけ

7ケースのうち6ケースが父親の企業の命令による海外赴任によって家族が移動したケースである。Tのケースは父と母双方が大学教員で留学に伴う移動であった。だからTのケースはあらかじめ移動の時期が予測されそれに伴う準備もされたが、残りの6ケースは転勤命令に伴いあわただしく家族で移動したと思われる。また今回のケースは移動歴をみてもわかるように、日本国内における転勤経験も多く、赴任国も複数に渡るケースが多い。また赴任する時は家族同伴で移動するが、帰国はB、S、T、Fのように家族全員と一緒に帰るケースは少ない。また帰国しても、父親が国内で単身赴任と言うSのようなケース、またBやFのようにいまだ父母は海外で滞在しさらに他国への転勤が予想されているといったように国際移動、国内移動の激しさを窺い知ることができる。子どもが学歴期になると、入学のタイミングと父親の職業移動のタイミングが合うことは難しいようである。

海外赴任に同伴された時期がそれぞれ異なるけれども、同伴に関して帰国子女の意思が反映はされたケースは少ない。YのケースやBのケースは行き先が香港ということで、「欧米諸国のほうがよかった」という正直な感想も述べている。低年齢から東南アジアより欧米諸国へのあこがれがみてとれる。海外赴任時の異文化体験の意味づけにこのような赴任前のその国のイメージが影響していると思われる。現地の文化に触れ、どのケースもさまざまな驚きや戸惑いがみられる。毎日泣いていたと言うKのケースや学校で迷子になってしまったTのケースはその例である。

BやYは香港に住んでいても、日本人学校に通い、遊び友達や家族の交流も日本人に限られている。さらに受験勉強のため放課後は塾に通う毎日であたかも日本にいるのと同然の中学校生活を送っている。現地の学校や地域社会との交流は一時的なもので、異文化に囲まれながらも周囲（学校や家族からの）の接触への動機づけが少ないことがわかる。Sは最初の移動地イギリスでは異文化に十分接触しながらも、第2の移動地イタリアでは、日本人学校へ通ったためBやYと同様な生活を送ることになる。またKはイギリスで現地校に通いながらも家族同士の交際はイギリス在住の日本人に限られたため現地の人との交流は少なかったようである。海外在住時現地校に通ったか、日本人学校に通ったかということ、家族がどの程度地域の人達と交流があったかということが異文化に接触機会を左右するように思われる。接触の機会は少ないがBもYも香港での体験は貴重で有益だと評価している。

AやS、Fは異文化体験に大きな意味づけを与えている。そしてこれらのケースすべて異文化接触到母親が大きな役割を果たしていることがわかる。コンボイとして、母が子の新しい友達ネットワーク構成を担っている。Aの場合滞在時は地域のボランティア活動に積極的に参加していることや英語が堪能であったこともあって帰国後も日本と外国との掛け橋のような役割を果たしていることがわかる。そのことがAの異文化体験を豊富にし、そ

して帰国後もその体験を膨らませていることがみてとれる。Sの場合、やはり母親の友達がイギリス人中心であったのでSの友達も現地の友達が多い。しかしイタリヤ移動後は日本人学校の友達と変化している。Fは友達作りの最初の段階で戦争中における日本と韓国の関係という歴史的な出来事の影響を受けていた。しかしそのような事件を乗り越えて友達関係を維持できたのは、本人の努力もあるがそのような事件をうやむやにせず、原因説明を求めわが子に説明をした母の姿勢はその後のFの異文化に対する考え方に影響を与えている。Tは現地校の先生から紹介された友達によって帰国後も熱中することになるドラムの手解きを受けている。わずか1年半の滞在の中にも人生に影響を与えることになる友達を得たのだ。

帰国時には、異文化体験を持った帰国子女は日本文化に向きあうことになる。Kは10歳で帰国し日本の小学校4年生へ編入、Aは12歳で帰国しK中学（帰国子女受け入れ校）へ入学、B,Sは15歳で帰国しK高校（帰国子女受け入れ校）へ入学した。Yは1年予定よりも帰国が早まったので地元の中学に戻り中学3年生を送っている。Tは中学3年の秋からもといた地元の中学へ編入し、同様にFも中学3年の3学期から地元中学へ短期間だが在籍している。だから帰国後の生活に対する受け止め方は、受け入れ校ではなく日本の公立学校へ編入した場合や、帰国時の年齢、帰国時家族と一緒にあったかによっても異なってくると思われる。BとSは帰国直後の寮生活を振り返って、集団生活や、先輩・後輩関係に疑問を持つ。またAはクラブ活動で日本的なスポーツトレーニングや先輩との上下関係に悩む時期があった。TやFは公立中学に短期間在籍中に日本における外国人の立場について考える機会を得た。Tは外国人という立場の自分に対して偏見なしに友達関係を構築できたイギリスでの経験から、日本で外国籍ということで差別された友達のことに大きな怒りを感じるとともに学校での同和教育のありかたに疑問を感じている。またFは日本人の一面的なものの見方、外国や日本における外国人に関する報道のされ方に違和感を持っている。

AやFは日常生活にとどまらず、K高校の教育方法が帰国子女受け入れを標榜しながらも日本的な受動的勉強方法にかたよりがちであったり、暗記をして点数主義であることを指摘している。これは海外を経験していてもBやSのように日本人学校出身者からは話題にでない。Tはイギリスの教育より、K受け入れ校の教育を評価している。AやFが特にアメリカの教育経験に大きな意味づけを見出しK高校の評価を加えたものと思われるし、Tは在学期間が短いこともあるが、日本の教育がTの意味づけの基盤にあってK高校を評価したものと考察される。例えばAは中学から入学して何度もアメリカ生活に帰りたいたいと思いながら過ごしていた。AもFも親から帰国決定を聞いた時には、双方ともショックを受け、帰りたくないと思ったほど、現地の教育に適応していた。しかし帰国後かれらはこのようなアイデンティティーを持ちながらも決して日本の教育に不適応であったわけではない。むしろAの言葉にあるように両方の視線を持ちながら幅広く物事をみたいという姿勢に近い。この点

AやFが帰国後の日本の生活に対して文化共生の価値観を持っていたことが認められる。

2) 異文化体験が将来のライフコース設計に及ぼす影響

日本人学校に通っていた経験を持つBやY、Sは海外で就職すること、国際結婚には消極的である。理由は「自分達の言葉が理解される」、「日本は便利だから慣れてしまった」「母国が一番という気がする」と日本のよさを強調している。Sはイギリスで現地の友達関係を持ちまたSの家族も地域社会に溶け込んでいたようだが、その一面イギリスでの生活はマネーにうるさい緊張をしいられる生活でもあったようだ。年齢的に自分で自由に行動できる年でなかったためか、「日本は好きではないが、日本に慣れてしまったから他のところで住むのは考えられない。海外は不自由」と考えている。イタリアに移った後にイギリスの友人達との交際はなくなっている。またTやKも同様に「海外で生活することに抵抗はないが、日本の方がおちつく」「日本人の方が気をつかわなくてよい」という同様の意見をもっていた。TやKはイギリスで友達はできたが、その友達関係は表層的であったようだ。Tの言葉を借りると、「イギリスは個人主義の国なので友達関係は濃密でない」ということになるが、Tの場合は滞在期間が比較的短期間であったこと、Kの場合ほとんどイギリスに住んでいる日本人家族と交流していた点などが影響していると思われる。同じ異文化経験でも、日本人に囲まれてコンボイネットワークが日本人だけが担ってしまった場合や比較的短期間の滞在であったこと、実際家族ぐるみの交流はあっても帰国子女本人の交際は必要に迫られての表層的交際であった場合は将来のライフコースにおいて、海外へ展開していくことは消極的になる傾向がみられる。

それに対してAやFは、在住開始年齢が異なるにもかかわらず、海外就職、国際結婚、留学、海外移住に対して積極的である。二人とも滞在国がアメリカであることや、滞在中家族が地域社会に溶け込み、現地校の教育になじんでいたことなど共通点がある。Aは公立小学校から私立の学校に転校することで、これまで形成していた友達ネットワークが再編される経験をもっている。またFも3回も同じ地域でありながら移動を経験したので公立の小学校を4校も経験している。特に最後の在籍校では、父親が先に帰国して母と兄と自分でアメリカに残っていた。Fも転校を経験することによって現地での友達ネットワークを何度も作り直している。帰国後も、Aは6年の長きに渡ってその友達関係を維持し、またFも電話や手紙で頻りに連絡をとりあっていた。このようなことから、異文化を体験する中で帰国子女本人のコンボイシステムがどれだけ地域社会と結びついていたか、そして本人の新しい環境における友達再編能力といったものが、将来のライフコースにおける海外への展開につながるとと思われる。

3) 異文化体験におけるコンボイの存在と帰国後のネットワークの変容

Bは香港滞在時日本の友達を中心にコンボイネットワークを形成していた。帰国後は寮生活を3年間送る中で同年齢の帰国生と共同生活を経験している。しかしBにとって意味のある友達は寮の友達ではなくK高校の帰国生の友達を中心に音楽バンドメンバーが自分にとって重要な友達であると話している。両親は香港にいて絶えずいろいろと相談はしているが夫婦単位の生活を送ることを了承しており、Bは両親と別に生活することで巣立ちをしたと自認している。

またYも同様に香港滞在時は日本の友達を中心にコンボイネットワークを形成していたが、帰国して地元の中学に通った時は香港に行く前の友達との関係を復活させようとした。しかしその時は中3とい受験期でもあり4年の間に日本の友達が変わったと感じている。また以前の友達からも自分が変わったと言われている。日本人学校へ行って関西弁をはなさなくなったことも一因であるようだ。K高校入学後は帰国生を中心として友達関係をつくるが、3年間の間に帰国生以外にも友達が増えていっている。

Sはコンボイネットワークの変容を何度も経験している。最初は、生活習慣の違いから溶け込むのに苦労した様子が伺える。しかし母の援助も得て現地のコンボイネットワークを形成している。イタリアに移ってからは母の友人関係も日本人中心になるに従い、Sも日本人学校中心の友達関係へと変化する。Sだけが一年先に帰国したので寮生活となるが、寮に束縛された友人関係に不満を持っていた。家族帰国後は寮を出ることによって寮中心の友達からネットワークを拡大させている。彼女は環境の変化によっていろいろな友達と出会い新しいネットワークを形成していくことが楽しみとまで話している。このようなことからSの重要な他者であり、役割モデルは母であることはまちがいない。

Aも同様にコンボイネットワークの変容を経験しているが同じ土地での友達の変化であった。Aの場合、Sと同様Aの母が地域社会に溶け込みAの友達関係をサポートしている。アメリカ在在中は小学生ということもあって公立から私立への転校時のように母主導型で友達関係が形成されていった。帰国後もAの母の国際的ボランティア活動や仕事の影響を受けて常にアメリカの友達と連絡を取り合う関係を維持していた。また同時に、K中学の友達関係も発展させていった。Aにとっては高校のきびしい部活動は一つの転機であった。先輩・後輩関係を知り、母の力を借りることなくそれを乗り越えることによって自分に一番つらい時といいながらも、コンボイネットワークがこの経験によって拡充されている。しかしながら現在でもAにとってはSと同様母は役割モデルであり人生上の重要な他者でもあるので卒業後の留学を反対されると、結局は両親の意見に従って日本の大学へ進んでいる。

Tは短期間の滞在ながら現地校の先生の紹介で友人を得ている。この2人の友人の手ほどきで現在熱中している音楽への道が開かれた。この友人関係から得た音楽関係の興味は帰国後Tの生活の重きをなすようになり、帰国後の友達関係は音楽を中心に形成されるよ

うになる。Tの両親は帰国していたが通学が不便だったので民間の寮施設に入っていた。学校の寮と違い、上下関係もなく仲間意識で生活し3年間を過ごす、彼にとっては音楽仲間との関係の方が重要である。短期間の滞在ながら彼にとってイギリスにおける友達はコンボネットワークを根底から変える人生上の重要な他者であるように思える。

Kはイギリスに在住している時から日本人中心のコンボネットワークで暮らし、帰国し日本の小学校へ編入した年齢も低かったせいか、日本での友達関係を再編するのも早かった。KはK中学へは帰国生枠で入学したが、日本の小学校に3年も在籍したので帰国生という自覚はあまりないようである。Kにとっての異文化体験は表層的なもので、イギリスにおける友達関係はそれほど深くなかったよである。

Fの生まれは香港であるが、香港を3歳の時に離れたのでこの時の友達関係はそれほど印象に残っていない。7歳から渡米して初めてできた現地の友達関係に横槍がはいるが、母のサポートによって回復、その後も転校をくりかえすが現地の友達中心のネットワークを拡大してゆく。そして帰国の時は自分ひとりでも残りたいと言うまで深い友達関係に発展する。帰国後は短期間だが地元の公立中学に戻り渡米前の友達関係をもう一度出会うことになるが、友達から外国人に対する差別的な発言を聞いて憤慨することになる。K高校入学後はアメリカ滞在時の友達関係を維持しながらも帰国生を中心に友達関係を形成している。Kにとって今は香港に単身赴任している父は海外からの情報をもたらしてくれ、将来のライフコースの先導をするような役割を果たしている。

以上のような7ケースのコンボネットワークの変容から考察できたことは、海外で何年生活したかということも異文化経験を推し量る一つの尺度ではあるが、今回のケーススタディーで明らかにされたように海外で形成したコンボネットワークの内容、そして帰国後そのネットワークをどの程度維持してきたかということが異文化体験を知る一つの尺度であるように思う。また比較的若い年齢で海外に在住した帰国子女にとって海外における友達ネットワークをどのように形成するか、2つのキーをがあるように考えた。第1のキーは現地校か日本人学校かということ、第2のキーは親がどのようなサポート役割を果たしたかということである。箕浦康子は、「養育者たる親自身が母国の文化に対して、またアメリカの文化に対してまちまちの志向を持ち、国際派といわれる親からアメリカにいなながらも日本を向いて暮らしている親まで、子どもの社会化環境として家庭内の雰囲気のアメリカ度、日本度はかなり違い、それが子どものアメリカ化を促進あるいは抑制することが考えられる」と述べていることと符合する。

まとめ

帰国子女にとって近年教育の門戸が開かれ、ロジャーグットマンがいうように「日本社会における新しい国際的エリート」として評価も加えられつつある。ここで紹介した帰国

子女達のケースは日本経済がバブルの時代海外に家族とともに赴任したケースがほとんどである。また彼らが海外に出た時はこれまでにない在外邦人数が上昇した時でもあった。海外赴任の期間は特定されていないのでいつ帰国するか、何年滞在するか予測が立てられない。ケースの中でも家族がバラバラに帰国したり、現在でも離れ離れになっているケースが多い。そのような状況の中で帰国後の教育環境を考えてベストという状況を想定し用意せざるを得ないのが現実であろう。このケースの中にも7例中、4例が塾通いが大変だったと述べている。このように帰国後の国内教育への適応をばかりに力を注ぎ、現地地で得られる経験に背を向けさず家庭教育のあり方に一部批判の声もあがっている。しかし帰国時期もわからず、次に派遣される国も分からない状態で彼らのライフコース設計はきわめて困難であることもまた事実である。

1988年に出された海外移住審議会の「国民の海外移住に伴って生ずる諸問題への対応について」と言う中では「海外で生活する子女は、海外での経験を積むことによって将来のわが国の貴重な人的資源となりうる。このため、海外子女教育は国際社会に通用する人材の育成をも念頭におき検討していく必要がある」と述べている。帰国子女は企業の都合で家族の国際移動を繰り返し、帰国後はその語学力や経験が国の人的資源として国際的なライフコースが期待される。しかし帰国子女というレッテルが貼られたゆえに豊かな語学力やその国際的なライフコースを期待されることに反旗を翻す例もあることがケースの中にも見られる。

帰国子女であること、すなわち家族単位の国際移動を経験することによって得られるものは語学力や派遣先の文化に対する知識だけに矮小される異文化体験ではないことがこれらのケースから読み取ることができる。社会的環境の変化を乗り越える人間関係調整力や家族の凝集力はその一例であろう。自分自身が外国人として生活をした経験から日本国内の在日外国人問題に目覚める例もある。

産業界が期待するような国際感覚を持って海外に飛躍する日本のビジネスマンといったライフコースは、帰国子女のライフコースにおいてほんの1パターンにすぎない。むしろ彼らが日本にいて、外からの視線で日本を見つめなおすこと、すなわち複眼的思考によって教育システムや日本における外国人の人権問題などに一石が投じる帰国子女のライフコースも描かれていることをケースデータより確認できた。この研究は、1998年度文部省科学研究費萌芽的研究の補助および、1998年度相愛学園特別研究費の補助を受けたものである。

参考文献

- 1) 竹田美知 (1999) 「異文化経験とライフコース」相愛短期大学 研究論集 第46巻
- 2) カニングハム・久子 (1988) 「海外子女教育事情」新潮選書 新潮社
- 3) 箕浦康子 (1991) 「子どもの異文化体験」思索社

- 4) 岡田光世 (1993) 「ニューヨーク日本人教育事情」岩波新書 岩波書店
- 6) 藤崎宏子 (1998) 「高齢者・家族・社会的ネットワーク」培風館
- 7) 森岡清美・青井和夫 (1998) 現代日本人のライフコース 日本学術振興会
- 8) R・グッドマン,長島信弘・清水郷美訳 (1992) 『帰国子女』
- 9) 佐藤弘毅・中西晃編(1988)『海外子女教育史』<資料編>(財)海外子女教育振興財団
- 10) 坂田直三 (1998) 「グローバル時代の教育」

表1

ケース	家族構成	滞在国	滞在歴	移動歴	海外在籍校
B(男)	父・母・姉・弟	香港	6年半	福岡→広島→小1千葉→小3香港→K高校(現在父母香港)	日本人学校
Y(男)	父・母・姉・弟	香港	4年	島根→大阪→小1奈良→小5香港→中2奈良→K高校	日本人学校
S(女)	父・母・弟	イギリス イタリア	8年 4年	3歳イギリス→11歳イタリア→K高校	現地校 日本人学校
A(女)	父・母・姉・弟	アメリカ	9年	奈良→3歳ダラス→K中学	現地校
T(男)	父・母・姉	イギリス	1年半	大阪→高知→小1大阪→小3神戸→中2ケンブリッジ→K高校	現地校
K(男)	父・母・兄	イギリス	4年	京都→小1ロンドン→小4日本→K中学	現地校
F(男)	父・母・兄	イギリス イタリア	8年 4年	香港→4歳日本→7歳アメリカ→中3京都→K高校(父香港)	現地校

図1 コンボイシステムの例示 (Kahn & Antonucci,1981)

